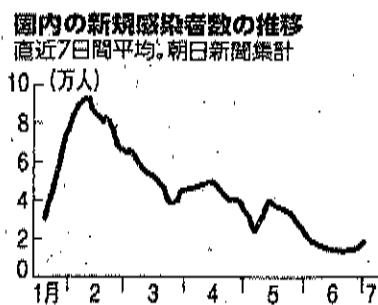


# 感染増加 じわり

新規感染者数の感染が、全国各地で再び増えつつある。新規感染者数は5月中旬から減少傾向が続いたが、1週間平均を見ると、32都府県で前週より増加（6月30日時点）。

医療機関では猛暑による熱中症患者とあわせて対応に追われている。感染がより広がりやすくなるオミクロン株のひとつ「BA.5」への置き換わりが進んでおり、専門家は「直線ムードがある」と、これまで感染者が増える懼れがある」と警戒する。



32都府県で上昇

トヨタ、日産の車が走る  
ところ、専門家は「無理で  
ないが、危険だ」。これと  
並んで、この車は「運転者  
感覚が壊れる恐れがある」  
と、専門家が警告している。

# コロナ 広がるBA.5

例は25・1%を占め、前週から倍増。主流だったA・2に代わり勢力を伸ばしつつある。国立感染症研究所の鈴木基・感染症疫学センター長は、「検出が少なくて不確実性が高い」としつつも、「（全国的な）検出割合が7月後半には半分を超える」と予想する。

要因のひとつが「BA-5」の広がりだ。東京都健  
康安全研究センターのPCT-R検査では、6月20日ま  
での1週間にBA-5の発

の新規感染者数は、6月22日に約1カ月ぶりに上昇に転じた。同月末時点では、山陰、九州、四国、近畿の8県が前週の1・5倍以上、東京都と大阪府も1・4倍台と上昇傾向が続く。

国内の直近1週間あたりの所見該当者数は、(図1)

# 医療逼迫 危ぶむ現場

熱中症同時警戒

4回目接種2割

合が7月後半には半分を超える」と予想する。

成院長は「コロナ感染と区別するため、抗原検査が欠かせない」と明かした。

「内科」では三口ナの受診者が増え、7月1日には10人の陽性が判明した。記録的な暑さのなか、食欲不振や倦怠感など熱中症が疑われる高齢者もおり、迫村泰

あるのが医療環境だ  
新宿区の「牛込台さくら内科」が

しかし、これは危機感をもたらすタイミングだ。

接種率が21・2%（内閣官房）。7月以降が本格化する。

30回接種で、3回目接種か  
からか月過ぎた60歳以上の

5月下旬始まりた4回  
間のワクチン接種は、6月

冷房を利かせるための換気不徹底が理由とされる。

や、過去に感染歴がある人の再感染も相次ぐ。ワクチンの3回目接種や感染から時間が経ったことによる免疫の低下、行動の活発化、

熱中症の急増が同時に、救急搬送の受け入れに消極的な病院が出てくる。夜間や休日などは特に患者受け入れが厳しくなるだろ?』

「のまま感染が急拡大する」と、医療逼迫を招きかねない。コロナの流行予測は見通せないが、冬を迎える糸州では、直近2年で流行がなかつたインフルエンザの患者報告が増えている。日本ワクチン学会は6月、秋以降のインフル流行期に備えて「今冬の国内の感染症対策と医療体制の維持のため、今シーズンのインフルエンザワクチン接種について、強く推奨する」との見解を公表。特に高齢者や医療従事者、合併症リスクが高い妊婦や生後6カ月未満の子どもなどに勧めたいとしている。

(林義則、米田悠一郎、辻外記子)